

ある遺書

出征ここに二年有半／常に死生の間を出入し／死生を思ふも吾に把握する所なし／只死すべき時に／従容として死し度き願望のみいよいよ強烈なるを覚ゆ

「武士道とは死ぬことと見つけたり」の一句／最後の関頭に於いて忘却せざらんことを期するのみ

戦陣常に亡母を想ひ／父を偲ぶ／生きて還へれば父の所へ／死してかへれば母の胸へ／只骨肉の情／抑ふるによしなし／限りなく慕はし

弟達よ 妹達よ／常によき兄たらんことを願ひしも／なす所なく／慚愧にたへず／疾風怒濤の時代／心を剛く正しく持して／それぞれの人生を確保してくれ

ヨシ子よ短い年月であつた／然し幸にも／君と僕とは常に一体であり得た／地上の二人の人間がかくも一つに／なり得るかを考へる時／驚嘆を禁じ得ない／神がもし只一つの願いを許せば／「永劫に君と共に」あらんことを願うであらう／如何なることであろうとも／僕は常に君と共にあることを信じて／雄々しく生きてくれ

小さき明子よ 未だ見ない恵子よお前等の母の腕の中で／ぐんぐん伸びよ／心のひろいやさしい人となつて／いつまでも／お母さんをまもつて あげてくれ

民族の運命をかけてのこの聖戦／総てをささげて思ふことなし／ああ日本／我等またこの国と共に永^{とこ}へに生くべし（昭和十七年十二月十六日夜）——原文のまま

戦地から妻に贈り還えされた一冊の岩波新書の行間余白に、鉛筆で記された遺書の全文である。妻は深く秘し続けて五十年、筆跡まさに消えんとする今、涙と共に写して肉親にそれぞれ送り届けた。日本の青少年を育んできた不朽の書「次郎物語」、著者下村湖人が第六部で完結しようとしたモデル。それがこの遺書の人だった。

（一九九〇年十月十五日）